

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00109

研究課題名（和文）文化大革命の記憶に関する映画史構築

研究課題名（英文）Constructing a film history on the memory of the Cultural Revolution

研究代表者

今泉 秀人（IMAIZUMI, Hideto）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・准教授

研究者番号：00263343

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトの大きな成果として、私達が文革映画史構築のための基礎的な研究として最も重要な先行研究とみなしている許子東『重読「文革」』（2011）の検討および、映画研究に必要な方法や視点を抽出し整理するために、訳文を作成したことが挙げられる。

当該書の「序」、「導論」、「第一章 “災難” 的前因与征兆」、「第五章 重読“文革” 的不同方法」を今泉が担当し、「第二章 “災難” 的降臨方式」、「結論」を阿部が、「第三章 考驗与拯救」と「第四章 反思与後悔」を好並が担当した。また文革を描いた映画作品と原作小説の対応関係や出版年次、発表媒体、日本語訳の所在などの各データを一覧にまとめる作業も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国で文化大革命が集結宣言をなされてから半世紀が経とうとしている。三年後の二〇二七年に「文化大革命後五十年」の国家的な行事が行われるのかどうか、そういうことすら表立っては話し合えないような空気が現在の中国にはあるように感じられる。

文化大革命を描いた映画を軸に「文革の記憶」をめぐる映画史を構築するという壮大な計画を日本で立ち上げたことの意義はまずこの点にあった。この三年間の科研プロジェクトで成し遂げたことは、最も重要な先行研究とみなされる許子東氏の十年以上前に出版された著作を今再び読み、そこから得られる知見を元に我々なりの文革映画史を構想することであった。三年間はその前半の作業に充てられた。

研究成果の概要（英文）：A major outcome of this research project was the examination of Xu Zidong's *A Re-Reading of the Cultural Revolution* (2011), which we regard as the most important prior work serving as fundamental research for constructing a history of Cultural Revolution film, and the creation of a translation in order to extract and organize the methods and perspectives necessary for film research.

Imaizumi was responsible for the book's "Preface," "Introduction," "Chapter 1: Causes and Signs of Disaster and Countermeasures," and "Chapter 5: A Re-Reading of the Cultural Revolution's Different Methods," while Abe was responsible for "Chapter 2: Methods of Disaster's Descent" and "Conclusion," while Yoshinami was responsible for "Chapter 3: Testing and Saving" and "Chapter 4: Reflection and Regret."

研究分野：中国語圏文学

キーワード：文化大革命 集体的記憶 映画 小説

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象を最上段に構えれば、「現代中国社会の心性の歴史」ということになる。直接的には、この半世紀に中国語映画の中に絶えることなく描かれ続けてきた文革のイメージが分析と考察の対象となる。映画に描かれた「文革の記憶」を通じて、中国社会の公的記憶の、いわば基調低音の響きの変化を聞き取ろうと考えるのである。

「文革の記憶」とはなにか。歴史的な事件としての文革、つまり「プロレタリア文化大革命」とは、1966年から十年間にわたって中国の社会秩序が崩壊し国家機能さえも混乱・停滞に陥った政治運動の嵐をいう。現在では、その主たる原因は中国共産党の指導部の中の抗争にあって、それに党組織や一般の民衆が巻き込まれたものだったとされている。階級闘争という名のもとに、無数の冤罪や迫害・暴行がまかり通り、100万を超える人々が死傷したと言われる国家的な悲劇であった。1980年代の後半においてすら文革はなお、社会全体がまるで昨日のことのように記憶していた出来事であった。ところで、人間にとっての「記憶」は記憶の「再生」のあり方と密接な関係を持っている。じじつ、ある体験を記憶化するプロセスの中で「最後に思い出したときの再生の仕方が不適切だと、最初の正確な記憶自体も損なわれてしまう」ということが、今日の脳科学の分野で次第に明らかになりつつあるという。このように考えていくと、歴史的・国家的・社会的経験である文革についても、21世紀の現在その記憶が、どのような形で再生され反復され、さらに新たな記憶として定着しているのかということに興味に向かう。

2. 研究の目的

振り返れば、映画は20世紀を通じて人間社会に最も大きな影響を与えてきたメディアだった。よって文革後の中国映画が繰り返し描いてきた「文革の記憶」が、現在の社会的記憶の基調低音になっていると考えることはそれほど突飛な思いつきではなからう。本研究の目的は、映画のなかの「記憶」に耳を澄ませること、表象を通じて現代中国社会の声を聞き取ることにある。

ここから少し視野を広げていくと、映画に描かれた「文革の記憶」を集め、糸として繋いでゆくことで文革期から現在までの中国映画に関する史的記述が可能になるのではないかという着想が浮かぶ。中国「文革映画」史の構想である。本研究は、映画に描かれた「文革の記憶」をもとにして、同時代の中国人の心性の歴史を問うあらたな試みである。思えば、中国映画がわれわれの目によく触れはじめた頃、1980年代末ごろには「文革の記憶」を描いて強烈な印象を残す作品が多かった。謝晋の『芙蓉鎮』(1986)や陳凱歌の『子供たちの王様』(1987)。その少しあと、90年代にも、『さらば、我が愛 霸王別姫』(1993)があり、田壮壯の『青い嵐』(1993)、張芸謀の『活きる』(1994)、そして姜文の『太陽の少年』(1995)など、次々に題名が思い出される。これらを21世紀の文革映画作品と比べてみると、その「文革の記憶」にはかなりの違い、温度差のようなものが感じられる。このような変遷を的確に記述し、そのメルクマールはどこにあるのかということをはっきりと明らかにするためには、当然のことながら社会状況の変化を、とくに観客の立場から考えていく必要がある。

文革を直接的に体験した世代はおよそ五十代なかば以上のそれにあたる。すると、現在の人口比率から見て中国人の多くは文革の直接的な記憶を持っていないことになる。とすれば、歴史的・国家的・社会的事実としての文革と現在の中国社会で流通している「文革の記憶」とがどのような関係の位相を呈しているのかという問題は、現在の中国社会のあり方を世代という切り口からとらえるひとつの有力な材料にもなるだろう。

3. 研究の方法

「文革映画」の源流をどこに置くかは、これからの検討課題の一つだが、劇映画の登場という点に絞れば、1974年の『火紅的年代』など文化大革命期のさなかから始まることは間違いがない。現時点で把握しているもので言えば、その流れは、2018年の『無問西東』にまで行き着くおよそ200本のタイトルを数えることができる。そしてこれらの作品の時代区分と作品ジャンルの分類を行うことが研究の第一歩となる。そのためにはまず、現在までに作り上げた文革映画作品リストを基にして、まずはこれらをすべて鑑賞し、関連文献を渉猟、閲覧することが必要となる。さらに、先行研究の成果を踏まえながらこれらのフィルム、および総体としての「文革映画」への認識を深めた上で、映画史のメルクマールとなる主題や技法、また映画をめぐる社会状況(映画製作、配給、視聴などの制度や環境)の変化も組み入れていくことで、「文革映画史」の大きな流れとその変化、さらにその映画史的意義について認識することができるであろう。

「文革の記憶」を個々の映画に即して丹念に拾い上げ、見つめ、記述し、分析すること、そして、それらを時間軸に沿ってつなぎ合わせ、作品相互の関係や、特に映画メディアをめぐる中国の社会的環境を背景にしながらかつ時的に編み直していくことで、もう一つの中国現代映画史を構築することが可能となる。そしてそれは同時に中国人の心象風景としての文革イメージの変遷を把握しそれを文字によって明らかにする作業になるのではないかと考える。

これが本研究の最終目的である。

4. 研究成果

2021～2023年度の研究実績として、阿部範之には、20世紀から21世紀の台湾映画を考察の対象とした「映画監督としての鈕承沢と2000年代以降の台湾商業映画の変遷」および、21世紀の中国語圏映画をめぐる比較文化的な論考「2000年代以降の台湾映画における中台市場への眼差し 金馬奨、文創、新型コロナを巡って」、21世紀の中国語圏映画を考察の対象とした「主旋律/IP映画としての『タイガー・マウンテン』 2010年代の徐克監督作を巡って」がある。

好並晶には、映像メディアと教学実践を結びつけた実践記録「いま、改めて “生の感覚” を取り戻すために アニメーションを用いた教学実践 」および、本研究のメンバー相互の対話的な書評、「論評: 阿部範之「馮小剛が映し出す主旋律の外の記憶」、『中国20世紀自伝回想録改題集』に収められた映画人の自伝回想録の解題「謝添『謝添口述我的悲喜人生』」、「胡蝶『胡蝶回憶録』」、「孫瑜『銀海泛舟 回憶我的一生』」がある。

今泉秀人は、「教授作家 西南連合大学の沈從文」および、「植民地の記憶 鍾理和「原郷人」の広がり」があり、いずれも中国における文化大革命と映画を直接結びつける内容を持つものではないが、中華民国期から 21 世紀の同時代中国社会(中華人民共和国および台湾) と文化表象、そして文学テキストや映画などのメディアをめぐる基礎的かつ発展的な内容をもつものであり、本研究の基礎研究期間に必要な研究実績として本研究の発展に裨益するものである。

本研究プロジェクトの大きな成果として、私達が文革映画史構築のための基礎的な研究として最も重要な先行研究とみなしている、許子東『重読「文革」(「文革」をもう一度読み直す)』人民文学出版社、2011 年(定本)の輪読とその内容を検討し、疑問点やこの本から得られる映画研究に必要な方法や視点を抽出し整理できたこと、また同時に訳文を作成したことが挙げられる。具体的には、当該書の、「序」担当:今泉、「導論」担当:今泉、「第一章 “災難”的前因与征兆(「災難」の原因と前兆)」担当:今泉、「第二章 “災 難”的降臨;方式(「災難」が降りかかる方法)」担当:阿部、「第三章 考驗与拯救(試練と救い)」担当:好並、「第四章 反思与後悔(反省と後悔)」担 当:好並、「第五章 重読“文革”的不同方法(「文革」を再読するいくつかの方法)」担当:今泉、「結論」担当:阿部、を作成した。さらに、文化大革命を描いた映画作品、およびその原作となった小説などの文学作品に関する対応関係や出版年次、発表媒体、日本語訳の所在などの各データを一覧にまとめる作業も行った。

なお、本研究は、「中国文化大革命の記憶に関する映画史の構築」(基盤研究(C) 研究課題/領域番号 24K03481:2024-2027)として、本研究課題の分担者のひとり好並晶が代表者となって、同一メンバーによって継続的発展を目指すことが決まっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 阿部範之	4. 巻 第19号
2. 論文標題 主旋律 / IP映画としての『タイガー・マウンテン』 2010年代の徐克監督作を巡って	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 G R 同志社大学グローバル地域文化学会 紀要	6. 最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 阿部範之	4. 巻 106・107
2. 論文標題 映画監督としての鈕承沢と2000年代以降の台湾商業映画の変遷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 野草	6. 最初と最後の頁 207-231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 阿部範之	4. 巻 53(9)
2. 論文標題 2000年代以降の台湾映画における中台市場への眼差しー金馬獎、文創、新型コロナを巡って	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 165-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 好並晶	4. 巻 18
2. 論文標題 いま、改めて “生の感覚” を取り戻すためにーアニメーションを用いた教学実践ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 渾沌 近畿大学大学院総合文化研究科紀要	6. 最初と最後の頁 199-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 好並晶	4. 巻 106・107
2. 論文標題 論評:阿部範之「馮小剛が映し出す主旋律の外の記憶」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 野草	6. 最初と最後の頁 255-258
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今泉秀人	4. 巻 106・107
2. 論文標題 教授作家ー西南連合大学の沈従文	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 野草	6. 最初と最後の頁 91 - 118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 今泉秀人
2. 発表標題 学術としての新文学 朱自清 (1898-1948) の場合
3. 学会等名 研究集会「古典から近代へ 清代と民国の学問」(大阪大学)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今泉秀人
2. 発表標題 ミャオ族幻想 沈従文と石啓貴
3. 学会等名 青島・重慶・湘西合同研究会 (日本女子大学)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今泉秀人
2. 発表標題 呉濁流『アジアの孤児』に見る言語の地層
3. 学会等名 中国文芸研究会1月例会（関西学院大学）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 好並晶（項目分担）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中国文芸研究会	5. 総ページ数 368
3. 書名 中国20世紀自伝回想録改題集	

1. 著者名 今泉秀人（項目分担）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中国文芸研究会	5. 総ページ数 368
3. 書名 中国20世紀自伝回想録改題集	

1. 著者名 林初梅、所澤潤、石井清輝	4. 発行年 2022年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 312
3. 書名 二つの時代を生きた台湾	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	好並 晶 (YOSHINAMI Akira) (90510503)	近畿大学・総合社会学部・教授 (34419)	
研究分担者	阿部 範之 (ABE Noriyuki) (20434681)	同志社大学・グローバル地域文化学部・教授 (34310)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関